

# 備陽史探訪

第99号

発行  
備陽史探訪の会  
福山市多治米町5-19-8  
TEL(0849)53-6157

## 永井氏由来

会長 田口 義之

ここに「永井(長井)氏由来」という古びた半紙の綴りがある。甲奴郡総領町稲草の龍興寺という禅刹に伝わったもので、内容は江戸時代前半期の書状をまとめたものである。本年は、二十一世紀の最初の年ということでの会の総会を始め、行事の度に「新世紀」だの「二十一世紀」だの胸がときめくような言葉が踊っている。その割には何事も変わらないようだが…。

備後地方の歴史を紐解いてみると、世紀の変わり目起こった大事件として、「関ヶ原」(十六世紀―十七世紀)と「水野氏の断絶」(十七世紀―十八世紀)がある。中でも有名な慶長五年(一六〇〇)の「関が原の合戦」を契機に起こった毛利氏の防長移封は、芸備地方に深刻な影響を及ぼした。以前、私はこのことを「民族の大移動」と表現したことがある。なにしろ中世以来連綿と在地

を支配してきた国人衆のほとんどがこの時毛利氏と行をともしたのだ。これは現在の各家の「引越し」といった生易しいものではない。当時の国人衆の「家」は一つの企業体である。それが根こそぎ防長に引越したのだ。

そこには人々の別離があった。在地に残る者、主君に付いて去っていく者、現在と違いこの別れは永遠と言つていいものであった。数百年住み慣れた土地を離れる苦しみはいかばかりであったか…。引き裂かれた一族は毛利氏が芸備を回復するまで永遠に会うことは無いのである。そして、それは叶わぬ夢であった。

「永井氏由来」の中に綴られた数通の書状は、そうした「別離」の悲しさを現代の我々に知らせてくれる。この「別離」の主人公は田総長井氏である。田総長井氏は鎌倉幕府草創の功臣と言われた大江広元の子孫に当たる。広元の次男時広は出羽長井庄を苗字の地として「長井」を称し、父の跡を継いで幕府の中樞に参画し

た。そして、その子孫の一流は備後守護職を相伝し、備後の各地に庶家を輩出した。田総長井氏はその一つで、甲奴郡田総庄に土着し、在名を採って「田総氏」を称した。正に「鎌倉以来」の旧族と言つていい。

ところが、この鎌倉以来の田総氏も住みなれたふるさとを離れるときが来た。「関ヶ原」である。田総氏の当主はこの時、有名な安国寺惠慧の讒訴を受け、浪人中だったとも言いが、それにしても四百年近く続いた豪族である。在地には親しい一族や被官が多く残っていた。この頃、田総氏の当主元里、その子元勝は相次いで死去したが、後を継いだ元忠は縁を頼つて長州萩に赴いた。元忠の姉妹は毛利家中の

歴々に嫁いでいるし、なにしろ長井氏と毛利氏は元を正せば同じ一族なのだ。そして、寛永年間、目出度く毛利家に仕官することが出来た。田



龍興寺に残る田総一族の墓石

総の龍興寺の僧が萩の元忠の住まいを訪れたのは、丁度この頃であった。元忠はさっそくこの僧に故郷への手紙を託した。



「皆様ご健勝の由で何よりです。さてさて一生の間、今一度お目に懸かりたく思っております。善鏡(僧の名前)のお物語りで、そちらの様子を知ることが出来、大変喜んでおります。」

「父元勝が大坂で死去しました節も申すに、執行された由、改めてお礼申し上げます。」

「私母はこちらで死去して二十八年になります。」

「皆様ご存知の清十郎とは私のことです。今は長井七郎右衛門と名乗り、当年とって五十八才になります。」



元忠の書状を受け取った田総の一族田総孫右衛門はさっそく返事を書いた。

「清十郎様を長井七郎右衛門様と申し、御息災の由、何よりです。殊にお子様お二人御ありの由、また、御仕官の望みを達せられた由、誠に忝く存じます。」

「ご存知の亀谷の滝口又左衛門は死

去しましたが、その子の万ふくと申すものは今は又左衛門と申し、水野日向守殿御領分四五千石ほどの代官を勤めております。今五十二歳になります。元忠様が故郷を出立された時のことを子供心に覚えておると申しております。」

「元忠様のお守役を勤めた右谷の二郎四郎は今年で八十歳になります。息災です。この者も元忠様の息災な御様子を聞き、喜んでおります。」

孫右衛門の書状には、この調子で故郷の所縁の者の様子が綿々と綴られる。そして、最後にこう締めくくられている。

「そちらの田総長井家所縁の方々に、お伝え下さい。田総には古老の者が無事息災でおります」と。」



書状の奥付は寛永十三年(一六三六)とある。関ヶ原の合戦から三六年、一族離散の痛みはまだ当時の人々から消えてはいなかったのだ。

今年の三月例会は、私の担当で田総長井氏の故地、甲奴郡総領町の史跡を訪ねることになった。出来ればこうした時代の荒波に翻弄された田総長井氏と在地の人々の喜びと悲しみを幾分かでもお伝えしたいと思っている。

### 平成十三年度総会開催

### 平成十三年度役員紹介

平成十三年度総会において、左記のとおり役員および監査委員が承認されました。任期は今年一年です。

一月二八日(日)午後三時四十分から、ふくやま市民交流館で、平成十三年度総会が開催されました。冒頭、田口会長が挨拶し、新世紀を迎えた今年、会の活動をより充実させていく決意を披露しました。続いて小林定市さんを議長に選出し、議事に入りました。

前年度活動報告・決算報告、同監査報告があり、いずれも承認されました。その後、一部役員の改選・新年度計画および予算案提案と続き、いずれも承認されました。議長解任後、午後四時四五分終了しました。

また、総会に先立ち午後一時半から長谷川博史先生(広島大学文学部助手)をお迎えし、総会記念講演会「戦国期備後国と出雲尼子氏」を開催し、八七名が参加しました。

また、終了後には五時半から備後遺族会館で新世紀会を開催し、六三名が参加しました。

今回の総会は、二十周年を終えて新たな出発の年を迎え、さらに充実した運営を行えるよう、様々な行事寺が提案されました。総会で承認された主な内容は2P〜7Pに掲載していますのでご参照ください。

▼名誉会長 神谷和孝

▼会長 田口義之

▼副会長 山口哲晶 中村勤史 馬屋原亨

▼事務局長 寺崎久徳(新任)

▼事務局員 佐藤秀子「会計」・佐藤 錦士 木下和司・三好勝 芳・塩出基久

▼参与 出内博都(城郭部会顧問) 佐藤洋一・栗田英夫・ 後藤匡史・中西晃

★歴史民俗研究部会

▼部会長 種本実 ▼副 平田恵彦

▼評議員 平田雅郁・小林さなえ

★古墳研究部会

▼部会長 山口哲晶 ▼副 網本善光

▼評議員 篠原芳秀・七森義人・安原誉佳

★城郭研究部会

▼副部会長(部会長代行) 小林浩二

▼副部会長 杉原道彦

▼評議員 黒木日出人・坂本敏夫

・高橋辰巳・寶龜雅郎

☆監査委員 藤井忠夫・杉原外志子

# 平成12年度活動状況一覧

## 【徒歩行事・青春きっぷの旅】

日 程	講 師	内 容	参加数
1月 9日(日)	平田恵彦	青春きっぷの旅 石の宝殿・明石の史跡めぐり	28名
2月20日(日)	田口義之	沼隈半島の古里、山南郷の歴史を探る	77名
3月20日(日)	坂本・宝亀	沼田庄小坂郷の中世を訪ねて	40名
3月26日(日)	平田恵彦	青春きっぷの旅 桜花爛漫、醍醐蒼天に咲き薫る	36名
4月 9日(日)	田口義之	風光る黄葉山に桜花舞う-神辺宿の史跡を歩く-	44名
11月19日(日)	平田恵彦	神楽月、薬塚野辺をひた歩く-高梁川右岸の石造物を味わう-	39名
12月 3日(日)	網本善光	笠岡の古代と近代	32名
12月17日(日)	七森義人	常城推定地を探る	17名

## 【バス例会・一泊旅行】

日 程	講 師	内 容	参加数
3月 5日(日)	平田恵彦	夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ-もう一つ別の津山城-	48名
4月23日(日)	小林浩・宝亀	春風駘蕩 安芸東西条を巡る	47名
5月20/21日(日)	平田・坂本・三好	我が手に国のまほろばを!	55名
6月11日(日)	田口義之	伊予河野氏の盛衰と大山祇神社を訪ねる	46名
9月17日(日)	種本・平田	備前福岡・長船の古代中世を訪ねる	51名
10月 1日(日)	小林浩・矢野	秋風索漠 大富山城に宮氏の盛衰を辿る	42名
11月 5日(日)	網本・安原	月の輪古墳に登る-あの伝説的な発掘調査の跡をたどる-	38名

## 【郷土史講座・特別歴史講演会】

日 程	講 師	会 場	内 容	参加数
1月30日(日)	出宮徳尚	ふくやま市民文芸館	西日本の古代山城について	80名
2月26日(土)	寺崎久徳	中央公民館	蛇円山からみた常城・茨城	40名
3月25日(土)	小林定市	中央公民館	鎌倉末期前後の福山地方の宗教	36名
4月22日(土)	七森義人	中央公民館	烽(とび)について	32名
5月27日(土)	篠原芳秀	ふくやま市民文芸館	謎の遺跡	42名
6月24日(土)	石井良枝	市民図書館	『海路藻屑(うしろくず)』について	38名
7月29日(土)	出内博都	中央公民館	備後における「南北朝遺文」について	36名
8月26日(土)	三好勝芳	市民会館	歴史を語るエジプト古代遺跡	32名
9月30日(土)	山口哲晶	中央公民館	月の輪古墳について	28名
10月21日(土)	岸田裕之	県博講堂	備陽地域における戦国時代の城と合戦	280名
11月25日(土)	田口義之	ふくやま市民文芸館	福山-歴史の謎-	63名
12月 9日(土)	福島政文	市民会館	福山市の最近の発掘成果について	34名

上記以外に以下の定期講座・学習会・読書会が実施された。

- ① 偶数月第1土曜日 「歴史小説読書会」 歴民研 (座長 種本実)
- ② 毎月第2土曜日 「『古事記』を読む」 歴民研 (座長 平田恵彦)
- ③ 毎月第3土曜日 「『備後古城記』を読む」 城郭部会 (座長 小林浩二)
- ④ 毎月第4土曜日 「古墳講座Ⅶ」 古墳部会 (座長 山口哲晶)

## 〈城郭研究部会活動計画〉

- ①月例研究会「中世を読む会」原則として第3土曜日午後7時から中央公民館で開催。  
「備後古城記」の解説・研究会。
- ②郷土史講座担当
- |           |                |           |
|-----------|----------------|-----------|
| ★1/28(日)  | 『戦国期備後国と出雲尼子氏』 | 長谷川博史(招待) |
| ★3/31(土)  | 『長和庄について』      | 小林定市      |
| ★6/30(土)  | 『山内首藤氏と毛利氏の時代』 | 堤 勝義      |
| ★10/27(土) | 題 未 定          | 木下和司      |
| ★11/24(土) | 題 未 定          | 田口義之      |
- ③バス例会担当
- |           |                     |         |
|-----------|---------------------|---------|
| ★2/18(日)  | 『松田氏の栄華の跡、金川城跡を訪ねる』 | 出内・小林浩二 |
| ★11/18(日) | 『新見庄の中世を探る』         | 出内・坂本   |
- ④徒歩例会担当
- |         |                    |      |
|---------|--------------------|------|
| ★4/8(日) | 『笠岡の史跡を歩く』(花見を兼ねる) | 岡田道章 |
|---------|--------------------|------|
- ⑥山城現地調査  
「『備後古城記』を読む」担当者が沼隈郡・深津郡・安那郡の山城を調査する。

## 〈古墳研究部会活動計画〉

- ①第19回「親と子の古墳めぐり」の講師を担当。運営は会員有志で協力して実施。  
★5/5(祝)に実施。「津之郷・赤阪コース」
- ②第12回「秋の古墳めぐり」を担当  
★10/21(日) 『広島市北部の古墳を訪ねる』 安原誉佳
- ③郷土史講座担当
- |          |                      |      |
|----------|----------------------|------|
| ★4/28(土) | 題 未 定                | 山口哲晶 |
| ★9/29(土) | 題未定(ただし秋の古墳めぐりの関連内容) | 安原誉佳 |
- ④古墳講座Ⅶは1月で終了し、2月から新シリーズ古墳講座Ⅷを開始。  
NHK教育テレビの「人間大学講座」のビデオを見ながら学習する予定。  
毎月第4土曜日午後7時より 場所は中央公民館・ふくやま市民交流館。
- ⑤『掛迫第6号古墳測量調査報告書』の上梓。かなり遅れてしまい、測量参加者や会員に迷惑をかけてしまったが、2月中旬には発行できるめどがたった。

## 〈歴史民俗研究部会活動計画〉

- ①月例研究会「『古事記』を読む会」を継続。第2土曜日午後2時から中央公民館で開催。  
ただし、3月(あるいは4月)で第1期を終了し、しばらく休みにはいる。  
第2期の再開時期は未定だが、『古事記』中巻の学習からスタートする。
- ②郷土史講座担当
- |          |                         |          |
|----------|-------------------------|----------|
| ★2/24(土) | 『ジャワ島とバリ島の神々を訪ねて』       | 三好勝芳     |
| ★5/26(土) | 『斉明天皇の凶心と当時の国際情勢』       | 寺崎久徳     |
| ★7/15(日) | 『古代祭祀の神饌と犠牲ー古代史のなかの肉食ー』 | 平林章仁(招待) |
| ★8/25(土) | 『深安二十六社について』            | 種本実      |
- ③バス例会担当
- |          |                  |      |
|----------|------------------|------|
| ★3/18(日) | 『総領町の史跡を探訪する』    | 田口義之 |
| ★4/22(日) | 『比婆山御陵と熊野神社を訪ねる』 | 種本実  |
| ★6/3(日)  | 『作州の名刹、本山寺を訪ねる』  | 平田恵彦 |
| ★9/30(日) | 『岩国の史跡を訪ねる』      | 今村武美 |
- ④青春きっぷ・鉄道記念の旅担当
- |          |                         |      |
|----------|-------------------------|------|
| ★1/7(日)  | 青春きっぷの旅『信長の野望の跡、安土城に登る』 | 平田恵彦 |
| ★3/25(日) | 青春きっぷの旅『法隆寺と藤ノ木古墳を探訪する』 | 平田恵彦 |
| ★10/7(日) | 鉄道記念きっぷの旅『近江八幡の史跡を歩く』   | 平田恵彦 |
- ⑤歴史小説読書会  
偶数月の第1土曜日午後2時から実施。会場はふくやま市民交流館または中央公民館。

## 【平成12年度支出入決算報告】

勘定項目	収入額	摘要	勘定項目	支出額	摘要
会費	1021000円	275人	会報・行事案内印刷費	298710円	
《内 訳》 一般会員 221人 4000円×221=884000円 夫婦会員 22組 5000円×22=110000円 中途入会割引 8人 3000円×8=24000円 高校生 2人 1500円×2=3000円			通信費	373625円	切手代など
			記念行事費	101134円	看板設置・講師料など
			事務局費	45424円	事務費含む
			広告費	10500円	福山リビング
			諸会費	19000円	文連・県史協会費
			部会費	14236円	
			慶弔費	10000円	
			備品費	37800円	ワープロコンパター
			講演講師料	40000円	交通費含む
雑収入	441157円		雑費	31990円	
書籍・資料販売等	389110円	『ふるさと探訪』販売など	記念誌発行	1000000円	一部(残あり)
利息	3240円		以上計	1982419円	
助成金	300000円	福山市・義倉			
前期繰越金	49536円		次期繰越金	221624円	
総計	2204043円	／	総計	2204043円	／

\*別に特別積立金500000円があります。

監査の結果、上記のとおり相違ないことを承認します。

2001年1月28日

監査委員 藤井忠夫、杉原外志子(印)

## 【平成13年度予算】

項目	収入額	摘要	項目	予算額	摘要
会費	1033000円	276名	会報・行事案内印刷費	320000円	
《内 訳》 4000円×230名=920000円 5000円×22組=110000円 1500円×2名=3000円			通信費	400000円	
			講師講演料等	120000円	講師宿泊・交通費合
			事務局費	100000円	事務費含む
			部会費	60000円	3部会で等分
			諸会費	20000円	
			『山城志』	350000円	
			勘定報告書作成費	100000円	残金
雑収入	660000円	『ふるさと探訪』販売など	記念誌発行	400000円	残金
前期繰越金	221624円		予備費	44624円	
総計	1914624円	／	総計	1914624円	／

# 平成13年度備陽史探訪の会行事計画一覧

## 【バス例会・一泊旅行日程】

期 日	曜 日	担 当	探 訪 地
2月18日	(日)	城郭部会(出内・小林浩)	松田氏の栄華の跡、金川城を訪ねる
3月18日	(日)	田口義之	総領町の史跡を探訪する
4月22日	(日)	歴 民 研(種本実)	比婆山御陵と熊野神社を訪ねる
5月19日20日	(土日)	旅行委員(榎・榎・蛸)	津和野・益田の史跡を訪ねる
6月 3日	(日)	歴 民 研(平田恵彦)	作州の名刹、本山寺を訪ねる
9月30日	(日)	今村武美	岩国の史跡を訪ねる
10月21日	(日)	古墳部会(安原誉佳)	広島市北部の古墳を訪ねる
11月18日	(日)	城郭部会(出内・坂本)	新見庄の中世を探る

## 【徒歩例会】

期 日	講 師	探 訪 地
2月 4日(日)	田口義之・平田雅郁	相方城の石垣の謎に迫る
4月 8日(日)	岡田道章	笠岡の史跡を歩く(花見兼)
12月 2日(日)	安原・片岡・馬屋原宜久	新市町の史跡めぐり

## 【青春きっぷ・鉄道記念きっぷの旅】

期 日	講 師	探 訪 地
1月 7日(日)	平田恵彦	信長の野望の跡、安土城に登る
3月25日(日)	平田恵彦	法隆寺と藤ノ木古墳を訪ねる
10月 7日(日)	平田恵彦	近江八幡の史跡を歩く

## 【郷土史講座・特別歴史講演会】

期 日	講 師	演 題
1月28日(土)	長谷川博史	戦国期備後国と出雲日子氏
2月24日(土)	三好勝芳	ジャワ島とバリ島の神々を訪ねて
3月31日(土)	小林定市	長和庄について
4月28日(土)	山口哲晶	未 定
5月26日(土)	寺崎久徳	齐明天皇の凶心と当時の国際情勢
6月30日(土)	堤 勝義	山内首藤氏と毛利氏の時代
7月15日(日)	★平林章仁(招待)	古代祭祀の神饌と犠牲-古代史のなかの肉食-
8月25日(土)	種本 実	深安二十六社について
9月29日(土)	安原誉佳	未定(ただし、秋の古墳めぐりに関係して)
10月27日(土)	木下和司	未 定
11月24日(土)	田口義之	未 定
12月 8日(土)	★外部招待(未定)	未 定

\*日程は都合により変更される場合があります。また、演題や行事タイトルも仮題です。

## 《城郭研究部会活動報告》

- ①月例研究会「中世を読む会」原則として第3土曜日午後7時から中央公民館で開催。  
「備後古城記」檀上本の解説・研究会。
- ②郷土史講座担当  
★3/25(土)『鎌倉時代末期前後の福山の宗教』 小林定市  
★7/29(土)『備後における「南北朝遺文」について』 出内博都  
★11/25(土)『福山—歴史の謎』 田口義之
- ③バス例会担当  
★4/23(日)『春風駘蕩 安芸東西条を巡る』 小林浩二・寶亀  
東広島市の史跡「安芸国分寺跡」、広島県最大の前方後円墳「三ツ城古墳」、大内氏の安芸・備後支配の拠点「槌山城跡」を巡り、帰途、竹原の町並みを散策した。
- ★6/11(日)『伊予河野氏の盛衰と大山祇神社を訪ねる』 田口・木下  
源平の騒乱で源氏に味方し、頼朝から御家人として認められ、南北朝以降は伊予の守護職を務めた河野氏の恵良山城跡と善応寺・こうもり塚・大山祇神社を訪ねた。
- ★10/1(日)『秋風索漠 大富山城に宮氏の盛衰を辿る』 小林浩二・矢野  
宮氏の居城「大富山城」を全山踏破し、浄久寺所蔵の大富山城主三代宮上総介景盛、宮家の家老山城守盛勝、浄久寺三世覚海禅師、以上三幅の寿藏拝観した。
- ④徒歩例会担当  
★2/20『沼隈半島の古里、山南郷の歴史を探索』 田口義之  
桑田氏の居城、何鹿(いかずか)城跡・丸山城跡、弥生時代の平形銅剣が出土した日枝神社裏山遺跡、山南小学校の石棺(?)、光照寺・悟真寺・西光寺等を見学。
- ⑤20周年特別徒歩企画担当  
★3/20(日)『沼田庄小坂郷の中世を訪ねて』 坂本・寶亀  
小早川家の重臣田坂氏の居城、稲村山城跡・土居屋敷跡、墓所と善根寺跡を探訪。
- ⑥山城現地調査  
「『備後古城記』を読む」担当者が三次市・双三郡・比婆郡の山城約40城を調査した。

## 《古墳研究部会活動報告》

- ①第18回「親と子の古墳めぐり」担当  
★5/5(祝)「神辺町～加茂町コース」(大坊古墳～猪の子古墳まで)
- ②第11回「秋の古墳めぐり」担当  
★11/5(日)『月の輪古墳に登る』 柵原(やなはら)町 網本・安原
- ③徒歩例会・20周年特別徒步行事  
★12/3(日)『笠岡の古代と近代』 網本  
★12/17(日)『常城推定地を探索』(1/23から順延) 七森義人
- ④郷土史講座担当  
★4/22(土)『烽(とぶひ)について』 七森義人  
★7/29(土)『謎の遺跡』 篠原芳秀  
★9/30(土)『月の輪古墳について』 山口哲晶
- ⑤古墳講座Ⅶ 毎月第4(初め第1)土曜日午後7時～ 会場は中央公民館及びSEVENS
- ⑥20周年記念出版に参加  
★古墳研究部会 1.「深安郡神辺町の古代」 2.「松永湾の古代」  
★個人として山口哲晶、網本善光、篠原芳秀、安原誉佳がそれぞれ執筆

## 《歴史民俗研究部会活動報告》

- ①月例研究会「『古事記』を読む会」を継続。第2土曜日午後2時から中央公民館で開催。
- ②郷土史講座担当  
★1/30(日)『西日本の古代山城—その軍事施設の視点—』 出宮徳尚(招待)  
★2/26(土)『蛇円山からみた常城・茨城』 寺崎久徳  
★6/24(土)『海路藻屑(かいろもくず)について』 石井良枝  
★8/26(土)『歴史を語るエジプト古代遺跡』 三好勝芳
- ③バス例会担当  
★3/5(日)『夢見月、神楽尾山の野に遊ぶ—もう一つ別の津山に会いにゆく—』 平田恵彦  
★9/26(日)『備前福岡・長船の古代中世を訪ねる』 種本・平田恵彦
- ④20周年特別徒歩企画・青春きっぷの旅担当  
★1/9(日)青春きっぷの旅『石の宝殿・明石の史跡めぐり』 平田恵彦  
★3/26(日)青春きっぷの旅『桜花爛漫、醍醐蒼天に咲き薫る—洛南の名園を訪ねて—』 平田恵彦  
★4/9(日)20周年特別企画『風光る黄葉山に桜花舞う—神辺宿の史跡を歩く—』 田口義之  
★11/19(日)20周年特別企画『神楽月、薬塚野辺をひた歩く—高梁川右岸の石造物を味わう—』 平田恵彦
- ⑤歴史小説読書会  
★2/5(土)『結城秀康』大島昌宏著 ★4/1(土)『吉川元春』浜野卓也著  
★6/5(土)『高杉晋作』古川薫著 ★10/7(土)『額田女王』井上靖著  
★12/2(土)『美貌の女帝』永井路子著

# 城郭部会城跡調査報告

小林 浩二

## ☆比婆郡口和町の城跡

口和町は比婆郡の西端に位置し、北部は釜峰山・笠尾山・八国見山・野呂山などの山々が連なり、この北部山地に発する藤根川・湯木川が南流し、宮内川と竹地谷川が合流して萩川となり、それぞれ西城川に注ぎ、耕地はこれら河川の沿岸に散在する。湯木川中流域の永田および宮内川下流域の向泉が比較的開けた地形で小盆地をなす。

明治三二年(一八八九)町村制施行により、**惠蘇郡の宮内・竹地谷・大月・向泉の四村が口北村、湯木・永田・常定・金田の四村が口南村**となった。昭和三〇年口北村と口南村が合併して口和村となり、同三五年町制を施行した。

## ▼竹山城跡 口和町宮内

市場集落の入口を防ぐような位置にあり、麓からの比高一〇〇メートルで東西三〇メートル、南北一〇〇メートルの範囲に三段に削平されたメートルの範囲に三段に削平された郭と背後の堀切で構築されている。主郭は一五×一〇メートルで北側に土塁を設けている。二段目の郭は二〇×二〇メートルで主郭とは西端の坂虎口で結ばれている。最下段の郭

は一五×三七メートルで中央に低土

塁がある。主郭の背後は堀切で断絶している。なお、先端部は鉄穴流し(砂鉄採取)で鋭く削られている。

## ▼熊谷城跡 口和町宮内

東麓からの高さ六〇メートルの頂上を一段のみ削平された郭で北側に土塁と堀切を設けた単純な縄張りである。頂上からの展望は素晴らしく金尾峠を越えて高野町にいたる道を西下に見下ろす。「芸藩通志」は熊谷新右衛門の名前を伝える。調査日 七月一〇日(月)

## 竹山城跡・熊谷城跡

参加者◎高瑞辰己

(◎印は調査担当者以下同じ)

## ▼釜峰山城跡 口和町湯木

湯木の北部に位置する釜峰山(七八メートル)にある。「芸藩通志」は湯木三郎則重の居城と記しているが、湯木氏の系譜については、史料が少なく明らかでない。鎌倉時代、湯木を中心に泉庄という荘園があり、安芸国の葉山城氏が地頭として入り、その一族とみられる武士が浦喜氏を名乗っていたが、この後に現れる湯木(浦喜)氏との関係は定かでない。

「山内首藤家文書」によると、応仁の乱の混乱期に延暦寺領泉田(現庄原市)への進出を図った山内氏・三吉氏・浦喜氏の間で紛争が続き、山内

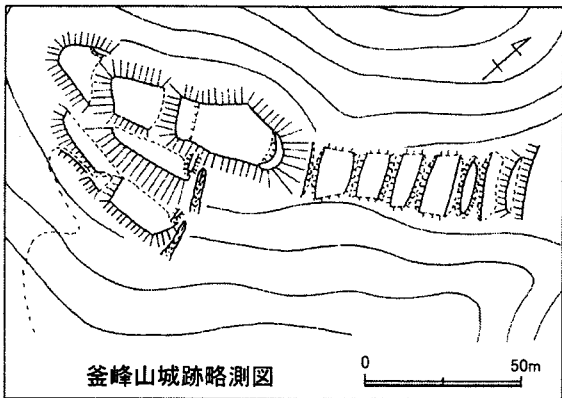
豊成は浦喜城を攻撃した。

応仁の乱後、泉田庄は湯木氏に預けられたが、その後も抗争は続き最終的には山内氏の支配地となり、湯木氏も山内氏の勢力下に入った。天文三二年(一五五三)五月、大

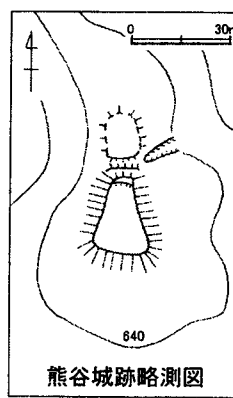
月と向泉の境の竹地谷川を挟んで毛利軍と尼子軍が戦った泉合戦の時、尼子の大軍が侵攻してくると、毛利方であった湯木氏は派遣されていた吉川元春の家臣一三名を討ち、山内氏とともに尼子方となり、尼子晴久は釜峰山城に本陣を置いた。泉合戦は毛利軍の勝利に終り、湯木氏は釜峰山城を失ったが、山内氏の家臣として江戸時代まで存続している。

湯木から伊与谷に入ると、釜峰山の中腹にある釜峰山神社まで車で行くことができ、神社から城跡までは良く整備された山道があるので、麓からの比高三〇〇メートルの高地にある山城にしては、容易に登ることが出来る。主郭からの展望は素晴らしく、尼子軍がここに本陣を構えたことは当然だったと思われる。

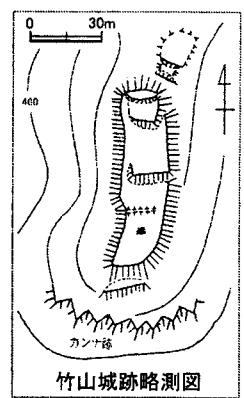
主郭は二五×一五メートルで後ろに高さ三メートルの土塁を設けている。東方に続く尾根は六条の堀切で防備している。主郭から五メートル低いⅡ郭は一四×一〇メートル、さらに七・五メートル低いⅢ郭は一三



釜峰山城跡略測図

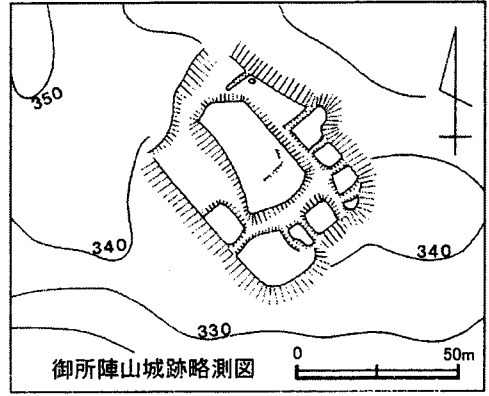
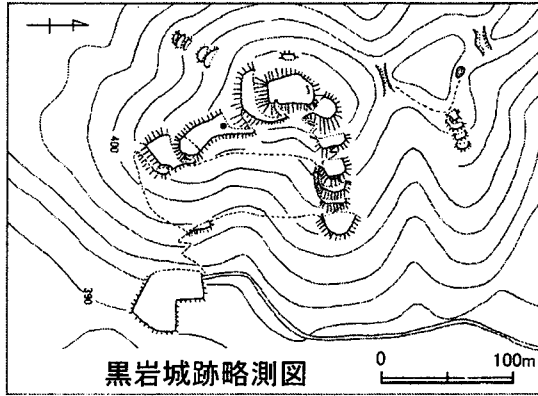


熊谷城跡略測図



竹山城跡略測図





黒岩城跡略測図

御所陣山城は向泉全域を展望出来る好位置にあるが、比高四〇メートルで山城としては要害の地ではない。主郭は四〇×二〇メートルで面積は約六二〇平方メートル（一八坪）である。東方の尾根を幅一メートル深さ三メートルの堀切で断絶している。この堀切の底と同一高低で主郭の北・西・南下に構築された遺構が特異である。まず南・西側に五・一〇メートル方形で高さ二メートルの土盛がそれぞれ二メートル幅の堀切状の溝で区画されて構築している。北側にも一〇メートル四方の高まりが見られ、西北側には一五メートル四

×一〇メートルで北側に土壘が見られる。南側斜面にも三段の郭が設けられⅢ郭から三メートル低いⅣ郭は三〇×三〇メートルで東側に主郭から坂土壘が下り、主郭との連絡道とも考えられる。土壘の東外側には一条の堅堀も見える。Ⅳ郭から一五メートル下のⅤ郭は中央で二段に分かれ東側の郭は一段高くなっている。これは西側の郭の南下にある大手道から攻め登って来た敵兵が虎口に入った時、正面から攻撃するためである。東郭の東側にはⅣ郭と同様に坂土壘が下がり、外方にも同じように堅堀が設けられている。

▼御所陣山城跡 口和町向泉

御所陣山城は向泉全域を展望出来る好位置にあるが、比高四〇メートルで山城としては要害の地ではない。主郭は四〇×二〇メートルで面積は約六二〇平方メートル（一八坪）である。東方の尾根を幅一メートル深さ三メートルの堀切で断絶している。この堀切の底と同一高低で主郭の北・西・南下に構築された遺構が特異である。まず南・西側に五・一〇メートル方形で高さ二メートルの土盛がそれぞれ二メートル幅の堀切状の溝で区画されて構築している。北側にも一〇メートル四方の高まりが見られ、西北側には一五メートル四

方の郭があり、主郭に次ぐ広さである。これらの土盛りと主郭のあいだは空堀になっている。これだけの構築をしながら、東方の頂上に続く尾根と、西側のなだらかな尾根には防御の施設が見られない。

【陰徳記】によると、出雲の月山富田城を二万の軍勢で出陣した尼子軍は、本陣を釜峰山城においた。二万の軍勢の中には補給・輸送等の人数も含まれていたであろうが、全軍が釜峰山城に入ったとは考えられない。多くの兵達は周辺の山中に簡単な小屋を立てて雨露をしのいだと思われる。さらに毛利方の黒岩城と対する前戦基地を築く必要があった。相当数の兵員を収容でき、黒岩城から一・五キロメートルの至近距離にある「御所陣山」はまさに最適の場所であった。さらに第一陣の攻撃後、尼子軍は本陣を釜峰山城から二〇丁（約二キロメートル）余り先に進めたとあり、まさにこの距離が御所陣山城の位置である。「御所陣山」の名称も泉合戦の故事にちなんで後世につけられたものであろう。

調査日 七月二〇日（火）

釜峰山城跡・御所陣山城跡  
参加者◎枝広博之・出内博都・小林浩二・坂本敏夫・佐藤錦士・田口義之

Ⅰ郭は四〇×二〇メートルで東南隅は大手道を受け入れるために郭内に一段低く枡形状の平坦地を設け防御している。また、ここから東尾根の郭群との連絡のための道がⅣ郭に延びている。東尾根には五段の郭が設けられており、Ⅴ郭は一五×一五メートル、そこから一〇メートル低いⅥ郭は八×二〇メートル、さらに一五メートル低いⅦ郭は一三×一七メートルの規模である。いずれも幅

方郭があり、主郭に次ぐ広さである。これらの土盛りと主郭のあいだは空堀になっている。これだけの構築をしながら、東方の頂上に続く尾根と、西側のなだらかな尾根には防御の施設が見られない。

【陰徳記】によると、出雲の月山富田城を二万の軍勢で出陣した尼子軍は、本陣を釜峰山城においた。二万の軍勢の中には補給・輸送等の人数も含まれていたであろうが、全軍が釜峰山城に入ったとは考えられない。多くの兵達は周辺の山中に簡単な小屋を立てて雨露をしのいだと思われる。さらに毛利方の黒岩城と対する前戦基地を築く必要があった。相当数の兵員を収容でき、黒岩城から一・五キロメートルの至近距離にある「御所陣山」はまさに最適の場所であった。さらに第一陣の攻撃後、尼子軍は本陣を釜峰山城から二〇丁（約二キロメートル）余り先に進めたとあり、まさにこの距離が御所陣山城の位置である。「御所陣山」の名称も泉合戦の故事にちなんで後世につけられたものであろう。

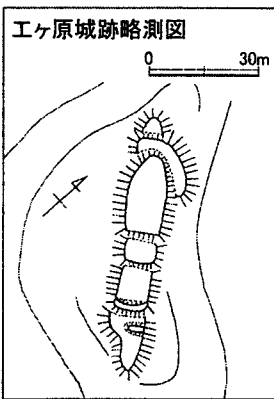
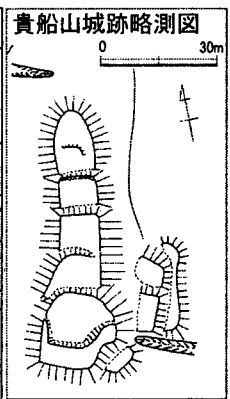
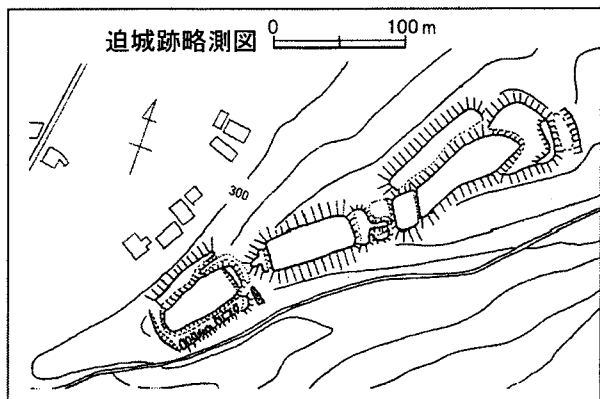
調査日 七月二〇日（火）

釜峰山城跡・御所陣山城跡  
参加者◎枝広博之・出内博都・小林浩二・坂本敏夫・佐藤錦士・田口義之

Ⅰ郭は四〇×二〇メートルで東南隅は大手道を受け入れるために郭内に一段低く枡形状の平坦地を設け防御している。また、ここから東尾根の郭群との連絡のための道がⅣ郭に延びている。東尾根には五段の郭が設けられており、Ⅴ郭は一五×一五メートル、そこから一〇メートル低いⅥ郭は八×二〇メートル、さらに一五メートル低いⅦ郭は一三×一七メートルの規模である。いずれも幅

▼黒岩城跡 口和町大月

双三郡君田村から「しんぎよ峠」を越えて口和町に入ると、すぐ正面にそびえ立つ山が黒岩城跡である。県道からの比高一四五メートルを測り、頂上のⅠ郭は一六・二二×三五メートルのほぼ長方形で北端に土壘が見られる。東側の南端にはⅡ郭から延びる連絡道が切岸を掘って虎口になっている。ここから南の尾根に三つの郭と西麓からの大手道を設けている。さらに東の尾根にも五つの郭を構えている。そして北側は鞍部の尾根に小規模な削平地と二条の堀切で北方の山と断絶している。Ⅰ郭から九メートル下がるⅡ郭は四〇×一メートルと細長く南側のほぼ中央にⅢ郭からの連絡道が入っている。Ⅲ郭は四〇×一八メートルで、北寄りには素掘の井戸が現存している。Ⅳ郭は二六×二〇メートルで東南隅



一メートルの連絡道で結ばれている。そして最下段のⅧ郭との間には三段の小規模な削平地がある。なおⅧ郭の南端からは谷に沿って大手道に延びる連絡道がある。

【芸藩通志】は黒岩城麓に松岳院を載せ、城主泉三郎左衛門久勝、大永年中（一五二一〜二八）開基としている。その場所は大手道が発する東麓の広場で、当初は泉氏の館が設けられていたと思われる。また、周辺には当時をしのぶ殿敷・土居・弓ヶ原・上堀・下堀等の屋号や古い地名が残っている。

調査日 七月二〇日（火）  
 参加者◎小林浩二・枝広博之・出内博都・坂本敏夫・佐藤錦士・田口義之

**泉氏**  
 大月の黒岩城を本拠として口和町西部を支配していた泉氏について、『芸藩通志』は黒岩城主として「泉久勝より三世久正まで所居」とし、『西備名区』では「信正・信行・久正」という系譜をあげている。大永元年（一五二一）泉久勝が多加意加美神社へ御神体を寄進したと伝え、また同社を天正四年（一五七六）再建したときの棟札に「大檀那 辛巳 藤原久正同子息藤原長久」とあり、久正・長久父子は実在の人物であつ

たことが知られる。泉氏の出自については、名前から推して地元向泉に生まれ成長した武士で、口和町西部を勢力範囲にしていたと思われる。また、根拠は薄いだが、三次の三吉氏系図（三次町郡志所載）に室町時代前期の人物として、泉五郎なる名前がみられ、戦国末期には三吉方について行動しているの、三吉氏からの分流の可能性も考えられる。

戦国時代を迎え、泉氏ははじめ尼子方に従ったが、後に毛利方の三吉氏と主従関係を結ぶようになり、天文二二年の泉合戦では黒岩城が毛利軍の本陣になった。

【芸藩通志】は現三次市三次町にある福谷山城について「福谷山城里村にあり、泉三郎五郎久正が所居、泉は三吉家士なり」としている。これは、三吉広高がこれまでの比叡尾山城に代わって三次町に新しい城下町を建設して、天正一九年（一五九一）比熊山城へ移るが、このときの家臣団の城下町集中政策として泉氏は大月を離れ、旧領を失って右の新領を与えられたのかもしれない。

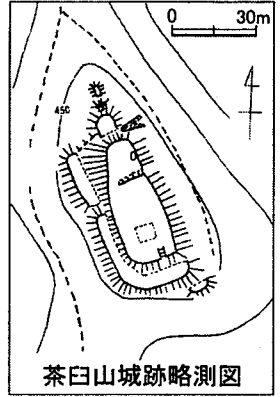
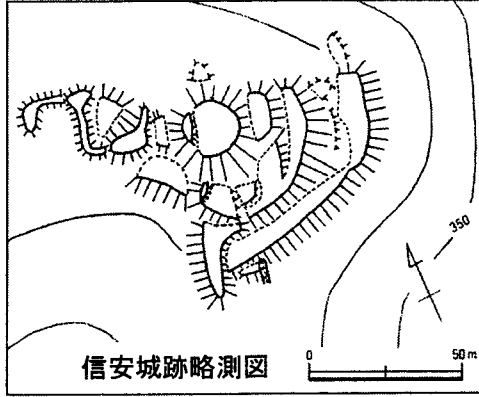
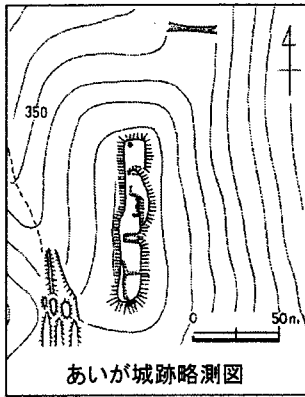
▼工ヶ原城跡 口和町金田  
 口和町の最南端に位置し、湯木川と西城川が合流する北側にあり、城跡の南側は急斜面で西城川に下がり、西側斜面も急峻で要害の地である。

縄張りには小規模で主郭は一九×一〇メートルで、そこから南に三段、北に二段の郭を構築している。城主名等は伝えられていないが立地から西城川を見張る城であったと思われる。

▼貴船山城跡 口和町永田  
 別名青掛山城ともいい、北麓からの比高七〇メートルで貴船山から北方に張り出した尾根上に構築されている。主郭は二〇×一五メートルで背後に物見台を兼ねたような土塁を設け、そこから北方に下がる尾根に四段の郭を築いている。東側に谷を隔てて南北に並走する尾根が主郭の下で結合する部分にも四段の腰郭と帯郭と一条の堅堀で防御している。

この郭群から東方下斜面に三、四条の堅堀状の溝があるが、鉄穴流しの跡と思われる。『芸藩通志』は城主貴船亮水を記している。

▼迫城跡 口和町湯木  
 当城跡は西麓からの比高約四〇メートルであるが、その全域は東西三五〇メートル、南北五〇メートルにわたって構築されており、面積は約一七五〇〇平方メートル（五三〇〇坪）あり、町内最大の規模である。縄張りには全体で三つの区画に分けることができる。まず標高三三〇メートルの頂上部で九〇×三〇メートルのI郭を中心とした中枢部と堀切と



土橋を隔てて六七×二五メートルの長方形のⅡ郭を中心とした中央部と、特異な土塁状遺構を要する六一×二七メートルのⅢ郭の先端部である。主郭であるⅠ郭の北方の二メートル低い郭には北端にし字型の土塁を設け、その外側は堀切で断絶している。さらに西と南側にも郭を設けている。Ⅰ郭とⅡ郭の落差は約七メートルで間には堀切と土橋が複雑に築かれており、虎口だったと考えられる。Ⅱ郭とⅢ郭の間は一五メートルあり、Ⅱ郭側から一段低く張出部を設けさらに堀切で断絶している。Ⅲ郭には北端に高さ三メートル、長さ二〇メートルの土塁を設けている。Ⅲ郭の東側五メートル下の幅一〇メートルのテラス状の平坦面に、高さ約二メートルで五×八メートル四方の小山を、幅一×二メートルの溝で切断して南北に九つ並べてあり、あたかも古墳が並んでいる様相である。このような遺構は御所陣山城跡にもあるが、他では見られない特異な構築である。南端先端部は堀切で断絶し西下に幅一〇メートル、長さ五七メートルの腰郭を構えている。このような広大な城郭を一地侍の湯木氏が領国経営のために構築することは考えられない。Ⅲ郭の東下の特異な構築は御所陣山城跡と同様で

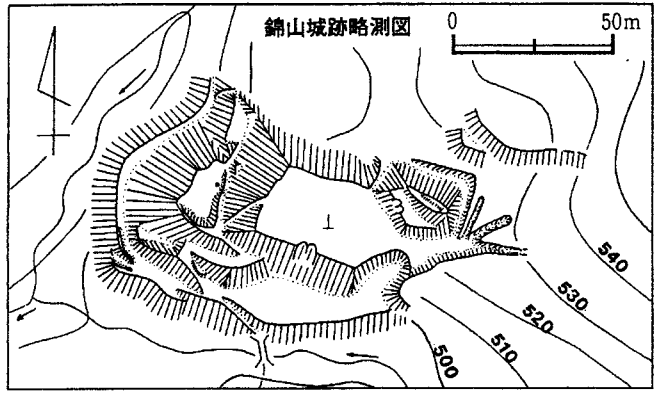
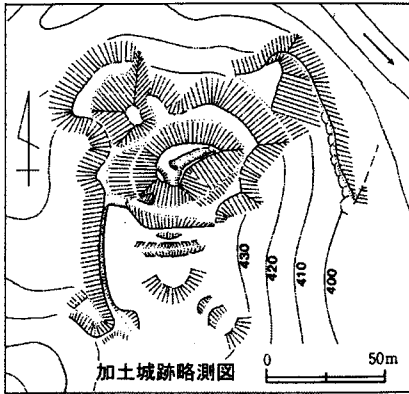
あることから、二つの遺構は尼子軍の陣地として築かれたと思われる。調査日 七月三〇日(日) 工ヶ原城跡・貴船山城跡・迫城跡 参加者◎坂本敏夫・小林浩一・高橋辰己

▼茶臼山城跡 口和町向泉 茶臼山城跡は、標高五六〇メートルの大仙山から南に延びる丘陵尾根に位置し、眼下に大月・向泉の水田地帯が広がっている。「芸藩通志」によると、城主は黒岩城の第三代泉久正で、黒岩城の出城であるという。主郭は一七×四五メートルで北は次第に狭くなって堀切を設け、その北側に堅堀がある。また、西側には堀切からやや下がって小郭を設けている。なお、主郭の周囲には幅五×一〇メートルの腰郭を巡らせている。このように当城は、郭の配置が簡単で、小規模であることから、黒岩城の出丸として見張り所程度の機能を果たしていたのであろう。

▼信安城跡 口和町向泉 この城は、標高三八〇メートルの尾根先端にあつて、小規模ながら複雑な縄張りである。Ⅰ郭は一八×四メートルで礎石とみられる石が点在し、北側に土塁を設けている。その背後は堀切で断絶し、さらに屈折

した土塁状の削平地が複雑に見られるが、当時の遺構か、あるいは鉄穴流しの跡かの判断は困難である。約八メートル低いⅡ郭は一五×六メートルで、さらに五メートル下がってⅢ郭がある。そこは幅三×五メートルで西側に長く延びてⅠ郭の西下で三段の郭とつながる。Ⅲ郭から一〇メートルの落差で最下段のⅣ郭は一〇×三〇メートルで最大の面積で西端はさらに西方に延びて帯郭になっている。小規模ではあるが多くの平坦面で構成されていることから居住した可能性が考えられる。調査日 九月八日(金) 参加者◎小林定市 茶臼山城跡・信安城跡

▼あいが城跡 口和町大月 大合戦橋の下を流れる竹地谷川を少し下ると急に両側から山がせまり渓谷となる。その渓谷の西側で標高約三八五メートルの山頂に東西に五段の郭と背後の鞍部に堅堀と堀切・土塁の遺構が見られる。Ⅰ郭は一〇×一五メートルで西側には土塁があり、南側斜面には二×三段に積んだ石垣も見られる。Ⅰ郭から〇・五メートル低いⅡ郭は一三×一八メートルで西側にはⅠ郭からの土塁が途中まで延びている。Ⅱ郭とⅢ郭の間は幅五メートル、深さ一メートルの



堀で区画され西側でつながっている。一・二メートルのⅢ郭にはドラム缶半分の大きさの石で中央が東西に半分仕切られ東側の端にも同じような石で繋がるし字形の石組がつくられている。なにか特別の建造物か施設でもあったのであろう。Ⅳ郭は一メートル低く東側で腰郭となつてⅢ郭の下に回つていて、四メートルの落差で一三×一五メートルのⅤ郭は北側に井戸跡と思われる窪みが見られる。ここから急斜面となつて北方に下がる尾根上には一条の堀切が設けられている。Ⅰ郭から西方はいったん急斜面で下がり北・南からの谷が入り込んで小さな鞍部となる所に長さ一〇メートル前後、高さ一〜二メートルの三つの土塁と南斜面に三条の堅堀があり、北斜面は一条の堅土塁と堅堀で断絶している。規模的にはコンパクトな縄張りであるが、石垣・石組・井戸跡、また背後の厳重な守りから一時的ではあるが、戦国時代の騒乱期での居住性を考慮した構築が考えられる。

城主の名前も伝わらず、「芸藩通志」の村絵図に所在が記されているだけである。

調査日 十月九日(月)

参加者◎小林浩二・坂本敏夫・高端辰巳

城主は福光氏と伝えられるが、詳細は不明。山内氏が長州に移ると福光氏は帰農し、子孫は木屋原村の庄屋を勤めた。

調査日 十月二四日(火)

錦山城跡・加土城跡

参加者◎矢野恭平・石森啓喜・岡田道章

☆比婆郡比和町の城跡

比和町は比婆郡の中央西寄りに位置し、町域の北から東にかけて、吾妻山・烏帽子山・比婆山・立烏帽子山・毛無山など標高一〇〇〇メートル級の山々が連なる。備後北部産地は古くより鉄の産地として知られ、なかでも当町域はその中心地で、享保年間(一七一六〜三六)の鉄穴の数は、八四で、恵蘇郡総数一二三の六四パーセントを占めた。

明治二二年の町村制施行により、恵蘇郡の比和・森脇・古頃・木屋原・三河内の五村が合併し、その中心地比和の名をとつて比和村となつた。同三年比婆郡が成立して、その所属となり、昭和八年町制を施行した。

▼錦山城跡 比和町森脇

城跡は比和川と久泉原川の合流点東にある錦山(八二二メートル)から西に派生した丘陵先端にあり、墓地造成により一部破壊されているが、郭・堀切・通路がよく残っている。主郭は五〇×二〇メートルで北東端が約二メートル高く、さらに北東側には土塁と堀切を設けている。南東端は堀切と堅堀の底とつながっている。郭の西端に虎口があり他の郭に通じている。なお、丘陵続きの山頂部は未調査である。「森脇村谷口社家古文書」や「恵蘇郡国郡志下調査

出帳」によると、正和五年(一三三六)頃、山内通資が関東から新市村(現高野町)移住するが、それ以前は錦山城に拠る森脇豊前守元定・三十郎・市正の三代が、地味庄北部を領有したが、正和年間(一三二二〜一六)前後、錦山城は落城した。

その後は山内氏の家臣湯浅肥前広吉が錦山城に入ったという。

▼加土城跡 比和町木屋原

城跡は比高五〇メートルの丘陵頂部にあつて、最高所のⅠ郭には西と南に土塁がある。Ⅰ郭の南側には深さ約一〇メートルの堀切を設け、その南側にも堀切や掘削の痕跡が見られる。Ⅰ郭の北側に帯郭を設け、この北東下に三角形の郭を配す。北西下に突き出た小尾根にも郭を配し、Ⅰ郭との間は堀切状になつている。

「吉川家文書」にみえる、享禄元年(一五二八)頃、出雲の尼子氏が攻撃した「小屋原之城」とはこの城のことであろうか。

# 『「月の輪」に歴史研究の出発点を見る』に参加して

牧平 悦美

十一月五日、好天に恵まれてバスは出発。山陽自動車道を順調に走り、和気ICから国道三七四号線へ降りて、左に吉井川を見ながら北上しました。五十分程走り、北東から流れて来る吉野川が、北西から流れ来る吉井川と合流する柵原町飯岡の地に着きました。

最初に訪れたのは、月の輪収蔵庫（郷土館）でした。

講師の網本さん、安原さんのご連絡も行き届いていて地元の妹尾さんが鍵を持ち、待っていて下さり、ご挨拶の後、中へと招き入れて下さいました。

館内には、内行花文鏡・珠文鏡が各一面、勾玉・管玉・ガラス小玉等の玉類をはじめ、銅製・鉄製の武器や武器・工具、そして石剣・櫛・針などの生活用品、舟形土製品、復元された円筒埴輪・朝顔形埴輪等が展示してあり、中でも家形埴輪の大きさに驚きました。これから登る現地はどのようなところかと期待するに充分でした。

郷土館から外へ出て、北東の比高二七〇メートルの大平山頂上に月の

輪古墳があると聞いても、目の前には木々が山をおおっていて、下からは見えません。

参加者三八名、月の輪古墳を目指して登り始めましたが、秋だといつても日差しはまだ強く、切り拓かれた林道を登るのはかえって疲れやすく、途中から草木の生えた山道になつてから元気が出てきたようでした。

約二・五キロメートルを一時間近くかかって歩いている間、昭和二十八年（一九五三）の月の輪古墳発掘に参加した飯岡村の中高生・婦人会・青年団等の人々と学者の方々が、真夏の暑さから厳寒の冬まで数十回にわたつて登り下りしてご苦労なさいたことを想い起こし、頭が下がる思いがしました。

ようやく尾根伝いに山頂部にたどり着くと、左に造り出し部分が見え、その後方に木々の間から大きな円墳の形が現れました。

墳頂の平坦部で網本さんから説明を聞きました。この古墳は自然の山を削り取り、整えて造られたもので、直径約六〇メートル、高さ約一〇メートル、斜面の中ほどに幅約一

メートルほどの段をめぐらし、頂上の平坦部の直径は一七メートルの巨大円墳で、付近の谷から運び上げた約八万個の葦石で葺かれてあつたとのこと。この平坦部には棺のあつた位置が示され、コンクリート柱で粘土槨の外輪や埴輪列等を表示してあります。円筒埴輪は三段にめぐらせて、総数八百余本もあつたそうです。

郷土館で見た埴輪がところ狭しと周囲や墳頂に立ち並び、葦石が敷き詰められた様子をこの規模で想像してみました。そうとう遠くからでもその威容は一目瞭然で、きつと朝夕な多くの人が見上げていたことでしょう。

少し遅めの昼食を墳丘斜面に座つてとっている時、毎日新聞社の大スクープ「旧石器ねつ造」の新聞が回ってきました。この事件は後々、各方面に大きな影響を及ぼしました。

「古墳で何だろう？」という素朴な思いから、延べ一万人の人々によって発掘された古墳の上で聞いたニュースは、同じ日本人として恥づかしかったです。月の輪方式と呼ばれたこの発掘のあり方に、本日のテーマ「月の輪」に歴史研究の出発点を見る」の思いを深くした次第です。

昼食後、山から下りて柵原ふれあい公園に着くと、職員の方々から出

来たての黄ニラのたつぷり入った雑炊を全員に振る舞っていただき、舌鼓を打ちました。思いがけないお接待に心も体も温まりました。

鉾山資料館では、一階に柵原町の歴史と鉾山町の暮らしを、地下一階では坑道内での採掘作業について展示してありました。

バスで五分くらい北に走った山の上には「坑道農業浪漫館」があり、案内所でヘルメットを借りて中に入りました。頭上の灯りもほの暗く、所々で水滴が落ちていきます。通路が複雑に交差していて勝手な行動をとると元の位置に帰れなくなりそうで、時々前後で声をかけあって進みました。年間通して気温・湿度が一定なので、ワインの熟成・作物の保冷・貯蔵に最適で、椎茸・花苗の発芽育成に利用されており、今日ご馳走になった黄ニラもここで作られたものです。

資料館の方は、柵原鉾山は廃坑ではなく休坑している、と力を込めて話されましたが、これからの科学の発達の大きな歯車の中へうまく組み入れられれば良いな、と思いました。古代から現代までの生活の一端を見学できた一日、準備をして下さった網本さん、安原さん、事務局の皆様にご感謝申し上げます。

# バラ絵のエスプレッソ

石井しおり

平成十二年十一月二十八日の午後、広島県立歴史博物館でブルガリア・マケドニアの墳墓壁画装飾研究家の講演があった。講師のユリア・ヴァレーヴァ博士はソフィア大学の助教で、マケドニア古代墳墓の美術及び初期キリスト教美術成立までの研究者として著名、二児の母でもある。

私は十一月二十七日の読売新聞朝刊で、ブルガリアのバラ生産会社社長、ヨシコヴァさんから「バラを市花」とする福山市へ、友好の証として新世紀に因んだ二〇〇一本のバラが贈られたことも知っていた。ブルガリアは農業立国で、福山へバラを贈られた同社の農場は、たとえば福山市から東城町あたりまでも続く大栽培園だという。

その翌日、現地の考古学博士から同国のお話を聴く機会に恵まれたのは本当に幸運であった。

講演はスライドと、流暢な女性通訳により進められた。そのスライドでは、時は古代、紀元前四世紀ころ。長い石の廊下はあの世とこの世の境を示唆しながら、その先に小規模の古墳があった。

壁の下部には幾何学模様、上部には小さな花と取っ手付き瓶にオリイブオイルを充たすギリシャ神話に由来する絵が描かれていた。そして椅子に座る王、側に立つ王妃と家族や家来、馬、葬列の青服の遺族など、恐らく実際の情景を写したのでろう。黄泉の国の女神が口許に柘榴の枝を含み、王に死の冠を授けていた。当時の慣習によると、その王妃は殉死の運命にあったといわれる。

続いてマケドニアのカザノフには、アレクサンダー大王の父、フィリッポの墳墓か、といわれる古墳がある。彼は紀元前三三六年に暗殺されたといわれ、その死後には複数の妃による王権争奪があったらしい。結果はアレクサンダー大王の母オリンピア妃の権謀術策によって、ケリが着いたと歴史が物語っている。墳墓に至る道は日干し煉瓦が敷かれ、墓室には円形、丸くて円錐状の屋根を持ち、壁には白色塗を施したマケドニア様式、その柱はギリシャ形式に似ているとか。

この小アジア地域には、各部族が住み合っており、北東にはオデリサイ族、ゲティ族、北西ブルガリアには、トリバーディ族などが暮らし、それらは南海岸を行けば、ギリシャのアテナにも通じたといわれる。また、北

部平原に赴けば、スキタイへ、トルコ国境へも近く、周辺の文化芸術の融合は更なる美を生んだに違いない。スライド映像で見るブルガリア北東の墳墓からは、神話による絵画やアテネ・アクロポリス様式のが掘り出されていた。二枚岩を継いだ天井は格子に彫られ、それに花・動物の頭。叙事詩のような絵柄があって、馬の耳の後ろに角の生えたタブローなどは、当時の叙情を示したもののか。古代トラキアの王の持ち物では、

王のシンボル松毬を示す金製品、愛用の銀製品など、その豊かな文化は驚嘆の思いであった。このたびの福山会場は、過日東京大学でブルガリア・マケドニア墳墓講演会に招聘されたユリア・ヴァレーヴァ博士のことを知った福山市の、かねて友好関係にあった福山バラ協会の方たちの熱心な招待によって実現したのであった。

ブルガリアと福山市のバラ交流は、一九九六年に始まったという。花を通じて現地を訪れた福山バラ協会の方々が親睦を深めて、二〇〇一本のバラが贈られ、さらには日本では唯一のブルガリア友好協会が設置されたという。青い瞳に色白の頬、亜麻色の髪を持つ博士は熱心に講演した下さった。

そして遙かかの地に思いを馳せている私の胸に、遠い昔が甦ってきた。今から三十年程前、娘の夫は結婚前の数年間、会社から派遣されてアメリカはシリコンバレーで仕事に従事していた。当時もその周辺は、世界的なエレクトロニクスの大拠点で、その折はからずもブルガリアから勉強に来た一青年と親交を結ぶようになった。約四年の苦闘のち、彼らは再会を約しながら故国へ帰ったのである。

よほど心の通い合う交友だったのだろう。彼は「もし子供を持つことができ、子供にもその意思があるならば、未来の夢を託して結婚させよう」といい、自国産のバラの絵を描いたエスプレッソカップと、錫に蔓草模様取っ手のカップケース、それに茶托を手渡してくれたという。娘のキツチンで色褪せりタイアしていたそれを、何時だったか物語とともに貰い受けて数年が過ぎていた。ロマンを温めていた私は、若く希望に燃える群像に憧れていたのだろう。

古代の匂いが薫り立つブルガリアの古墳壁画と二〇〇一本の友好のバラに、ブルガリア青年の物語が重なる。今更のようにバラ模様のカップを手に取り、眺めている初春のひとつときであった。平成十三年一月三日。

# 初冬・京都の旅

## 岩下千枝子

昨年暮れの生駒・佐保路の旅から  
丸一年。待ちに待った今年十二月九  
日・十日の初冬に宇治・嵯峨・嵐山  
に旅をした。

総勢八人の美男美女は、子供のよ  
うにはしやぎながら、新幹線の福山  
駅に集まった。さすがは特急、京都  
まではアツという間。京都から宇治  
への電車、箱形車輛で何やら懐かし  
く思いつつ、宇治平等院へ向かった。  
平等院に近づくと、山門の屋根に  
瓦と同色の愛らしい桃と鬼面の造形  
が見えてきた。平安時代後期、藤原  
道長の別荘であったといわれ、その  
死後に長子頼通が寺院としたといわ  
れている。

鳳凰堂には天喜元年（一〇五三）、  
仏師定朝が刻んだ丈六の本尊、阿弥  
陀如来像が安置されている。壁面に  
は五十二体の雲中供養菩薩が飛翔し  
ているはず。この度は他県に貸し出  
され、三体のみが歌い、踊り、演奏  
していた。五十二体揃ったらどんな  
にか優雅であろうかと思いつつ、懇  
ろに合掌して堂宇を後にした。

宇治川の朱塗りの朝霧橋を渡る途  
中美男美女は橋に負けじと一世一代

の顔をしてカメラに収まった。  
木々の間から檜皮葺きの宇治上神  
社が現れた。応神天皇の離宮とも称  
され、鎌倉建築の清楚な本殿が覆屋  
の中に建っている様は神々しい。  
時は昼過ぎ、腹減った、腹減った  
の声（とくに私）が続き、やっと瀧  
酒な食事処で、目の前の宇治川の流  
れを愛でながら定食を頂いた。

満腹に気をよくしながら興聖寺へ。  
有名な琴坂は紅葉のトンネル、同寺  
は道元の創建。隈なく掃き清められ  
凜とした空気の漲る寺域であった。  
三室戸寺の参道は見事な杉並木で  
あった。光仁天皇が創建したと伝わ  
る天台宗の古刹で、境内は池泉回遊  
式庭園となっており、周りの木々に  
は未だ黄・紅葉を残し、美しい彩り  
だった。

日が落ち始めたころ万福寺へ。中  
国から渡来した隠元禪師が開祖、黄  
檗宗本山で、廊下には正崩しの  
欄干、大きな魚柳等がエキゾチックな  
様相を呈しているのにはびつくりした。  
一日目が終わり、一番楽しみであ  
る「京都東急ホテル」へと急いだ。  
夕食には中国料理の円卓を囲み、老  
酒、エビチリ、フカヒレスープ等々、  
「腹いっぱいだー」といいながらも、  
こんなおいしい物を残すものかと  
「あとは別腹、別腹」といいながら

全部腹に納めてしまった。  
その後、京都に来る前に時間が  
あつたらと密かに企てていたライト  
アップの高台寺へタクシーを飛ばし  
た。豊臣秀吉の正室ねねが、亡き夫  
を偲んで開山し、自分の戒名を称し  
て高台寺とした由。徳川家康は彼女  
に手厚い援助を贈り、寺運は盛んで  
あつたという。

高台寺は全山仄かに暗く、細々と、  
かつ明るく照明されて、プロの技を  
すべて駆使されている。あまりの美  
しさに私たちは一瞬間言葉を無くした。  
その絵模様は「あの世の極楽」だろ  
うか。説明はいろいろな、自分たちそ  
れぞれの目で見て堪能してほしい風  
情であつた。一同は興奮と充実感で  
眠れないまま朝を迎えた。

朝食は京都の「たん熊」の朝粥。  
旅に出ると一段と気が大きくなつて  
一同「ドンと来い」の調子である。  
時雨降る中を大覚寺へ。朝早い庭  
には名残りの清楚な嵯峨蘭が咲いて  
いた。御所のたたずまいと、洋々た  
る大沢の池へのため息は大きい。紅  
葉と松の緑の調和の美しさをバック  
に、ピアップで一人ずつカメラに収  
まった。  
雨も上がり、清涼寺へ。その道す  
がら、あぶり餅の店を見つけた。こ  
れは是が非でも喰わねばと、急ぐ

リーダーを丸め込み、待つこと十分、  
旅の恥はかき捨てとばかりに歩きな  
がら食べるとその足取りも軽かった。  
清涼寺には、東大寺で修学した高  
僧が永観元年（九八三）に宗に渡り、  
かの地で造らせて持ち帰った有名な  
釈迦像がある。この像の説明と拝観  
はお供千円志納にてできる。読経と  
ともに太鼓が打ち鳴らされて緞帳が  
上がる。像の胎内から絹製の五臓六  
腑が発見されたことは耳目に新しい。  
化野念佛寺、小倉山の麓にある祇  
王寺、滝口寺には美しくも悲しい物  
語を残す。竹林の美しい長い道を抜  
けて天龍寺へ。後醍醐天皇の霊を慰  
めるため、足利尊氏が創建した寺で、  
京都五山第一位の名刹である。夢窓  
疎石作の曹源池庭園は雄大で、迫力  
があると思つた。

霧にけむる嵐山の峯を望みながら、  
渡月橋畔にある琴きき橋の碑の前に  
佇むと、「松風か琴の音か」と耳を傾  
けた源仲国の様子が想像される。上  
流へ二百メートルほどの場所に小督  
の五輪塔があつて、高倉天皇との悲  
恋を思い出さずに入られなかった。  
午後五時、後ろ髪を引かれる思い  
で京都を後にしたが、予想外のドラ  
マがいつぱいだった一泊二日の旅は  
意義あるものだったと思う。

平成十二年十二月十一日記

# 我が家の菩提寺いえ

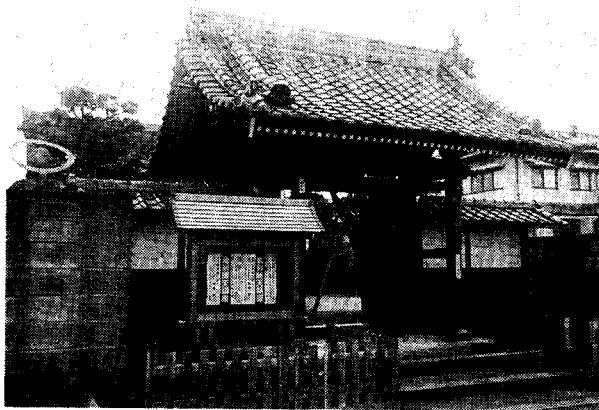
後藤 匡史

我が家の菩提寺は大分市勢家町三丁目にある。真宗大谷派、東本願寺末寺、潮音山法専寺という。

山号の潮音山は、この寺が海辺にあったことに由来する。今は埋められて海は遠くなってしまったが、このあたりの海を春日浦とい、以前は新宮寺浦ともいった。その最盛期には九州六ヶ国（豊前・豊後・筑前・筑後・肥後・日向半国）の守護職を保持した、切支丹大名大友宗麟の南蛮貿易港として栄えたところである。

寺の創建年代は定かではないが、慶長年間（一五九六～一六一四）と推定され、既に四百年は経っていると思われる。ただ、境内にある阿弥陀如来像には「貞享三年（一六八六）丙寅四月十五日、導師浄土寺見口社生眷千日念佛廻向豊後府中勢家町、尊体建立法蔵寺願主蕉浄心、駄原鑄物師、阿倍利兵衛」とあり、これから判断すると、その歴史は三二五年になる。

この如来様の胸から膝にかけていくつもの穴が開いているが、これは弾痕であるらしい。当寺二十一代御



潮音山法専寺山門

院家いんげさんのお話によると、明治十六年（一八七七）、西南の役の時、西郷隆盛に加担せんと、元中津藩士増田栄太郎が同土中津隊八十数名を引き連れて、大分県中津支庁（現中津市）や大分県庁（現大分市）を襲撃した。しかし、城内の政府軍の守りは固く、業を煮やした中津隊は、町々に火を放ち、鹿児島に向かったが、その時の銃弾の跡とのことである。

また、秘仏聖徳太子幼像、赤童子はもととは神宮寺にあったもので、明治元年（一八六八）の神仏分離令

による神宮寺解体の際、法専寺に移されて保管されたと、ものの本に書いてあった。

平成十年（一九九八）四月八日、大分県文化財保護委員と宇佐風土記の丘学芸員がこの仏像の調査に来た際、胎内銘が発見された。それには「貞和三年（一三四七）丁亥八月、康成」とあったという。私は故郷からの手紙に驚いた。貞和三年は南北朝時代、北朝第二代光明天皇時代の年号、また、康成南都西大寺仏師である。そして康成の父は大仏師法眼康俊、法眼といえは仏師の最高位である。鎌倉時代、東大寺南大門にある金剛力士像を製作した、かの運慶も法眼であった。

二十七年、父に連れられて西国を回っていたとき、大分県日田市にある慈眼山永興寺を訪れたことがあった。この寺の四天王のうち多聞天・持国天・広目天の三体はいずれも国指定重要文化財であるが、その墨書銘に、元亨元年（一二三二）、元亨二年（一二三三）の年号と大仏師法眼康俊、小仏師康成、俊慶の名があったの想起した。あれから長い年月が流れたが、このたび康成に再会できたのである。この像も康成最盛期のものと推定され、少々傷みがあるが、修理すれば県の重要文化財

級という話である。

閑話休題、妻との祝言の時、現御院家さんの父君に書いていただいた詩をここに掲載させていただく。

一人と一人が会う

世界何十億の人間の中で

一人と一人が会う

この奇妙不思議さよ

これもしも多生の因縁と

言うのであるうか

まことに人生は邂逅である

人間の思いを超えて

今ここに現行するこの事実

心素直に頂くばかり

後藤匡史君の結婚式を祝して

昭和四十七年五月十四日 むがい

昨平成十二年十一月二十日、今は

亡き妻の十七回忌を菩提寺で行った。

墓石 後藤庄作子 釋尼如苾安政五年

（一八五八）戊午九

月八日

後藤ヨ子 釋尼貞養 明治四

十一年（一九〇八）

後藤家の墓 昭和六十年（一九

八五）七月一日建

立 父 熊一

母 シナ

合掌！南無阿弥陀佛



## 「お弓」談義

門田 幸男

鞆の祇園さんのお弓神事も近いの  
でこの神事について考えてみたい。

弓は破魔弓などというように呪物  
であるが、本来は武器なので両面か  
ら考える必要がある。お弓神事は二  
人の射手(弓主)が競う形で行われ  
るので、まずその年の吉凶を占う意  
味が考えられる。しかし、武術の上  
達は武家の子弟にとって至上の命題  
なので競うのはある面当然である。

ところで、神事に先立ち、宮司が  
甲乙と書いたを外して四方の空へ  
矢を放つ。これは植物の生育を助け  
る魔を祓い、五穀豊穡を願う呪術と  
見受けられる。また、両弓主は神事  
を齋行するに際し、前もって忌み籠  
もりをすることになっている。

柳田国男先生の調査によると、籠  
もりには約束事があるという。すな  
わち「一、出歩かない。二、他人を  
入れない。三、物音を立てない。四、  
金属刃物を持ち込まない。五、炊事  
の世話は女を卒業したお婆さんがす  
る」等々である。しかし、これで神  
に近づくことのできる聖い人間にな  
れる(柳田説)とは思えない。

そこで参考資料を一つあげたい。

「誰そこの屋の戸押そぶる 新嘗に  
わが背を遣りて 齋ふこの戸を」  
(誰ですか この家の戸を掃するの  
は 新嘗に夫を送り出して 齋み  
籠もっているこの家の戸を)

昔、神を迎える役は女性だったの  
である。沖繩では今も祭祀は女性に  
限られている。訪れる神も男神と決  
まっていたらしい。有名な三輪山の  
神も夜半に活玉依姫のところに通っ  
ている。神話では妊娠しているが、  
現実には不可能だ。そこで沖繩では  
神女が籠もりの後に神の子と成って  
出現する。その時、神女は裸になっ  
ているそうだ。衣服を着た赤ん坊は  
産まれないという理屈である。女性  
が司祭者ならこういうことになるが、  
本土では早くから司祭者は男性に変  
わっているから別の考え方をしなけ  
れば理解できない。

「万葉集」巻十四／三四六〇

齋うとは何か。私は狭い空間に籠  
もっているのだから「居這う」かと  
思ったりもしたが、間違いのようだ。  
這うだけでは聖らかな人になれない。  
土橋寛先生の「日本語に探る古代  
信仰」によると、「イ」は元来、生  
命力・霊力を意味する名詞であり、  
たとえば「イ串」などのように「イ」  
を冠した類は「人為的に霊力を与え  
たもので、その行為を「イハフ」

という」そうである。つまり「ハフ」  
は霊力が賦与されることである。籠  
もりについていえば、籠っている間  
に神霊が依り着くことで、弓主は姿  
形は人間でも、見えない神の霊力を  
羽織っているわけである。

昔から分かっていることだが、神  
様の目に見えないことが、いろいろ  
と問題を起す原因となる。何年か  
前に女性新聞記者が弓主の立つ舞  
台に上ろうとして氏子連中と悶着を  
起こしたことがある。神を羽織った  
弓主の立つ神聖な舞台に何の分別も  
上るのは制止されて当然なのだが、  
その時の言葉がまずかった。「女はダ  
メだ。穢れている」などといったの  
で「女性蔑視だ、差別だ」と新聞に  
書き立てられた。前もってお祓いを  
受けるなど、作法を守らない方にこ  
そ責任があると私は思うのだが、気  
まずい結果となつてしまった。

土橋先生によれば、「イハフ(齋  
フ)の「イ」はまた、「齋庭」や「齋  
ツ磐群」のように「ユ」とも音韻が  
変化するという。

とすると「弓」もまた神聖な霊力  
を感じさせる名前である。これは私  
見だが、弦は弓弦、弓の先端は弓端  
なので、「弓」は本来「齋身」であつ  
たのではないだろうか。また、弓の  
形は蛇に似ており、蛇は神そのもの

と考えられていたので、私の論法も  
決して行き過ぎではないように思う。  
中には、矢の飛ぶ音ヒューンのユが  
語源とした本もあるくらいで、これ  
ほどには私の発想も的外れではない  
と思っている。破魔弓など、存在す  
るだけで威力がある考えられている  
からである。

さて、籠もりから開けると、弓主  
は従五位に任じられることになつて  
いる。祇園祭の稚児さんも五位少将  
の位をもらう。そのわけは六位以下  
では天皇のいる大極殿に昇殿できな  
いからで、これを神殿に準用してい  
るわけである。この原則から推し量  
れば、柿本人麻呂が六位以下の田舎  
役人だといった斎藤茂吉先生の説に  
従うことはできない。

余談はさておき、地名の鞆の由来  
となつた「鞆の音」だが、何しろ神  
社にある鞆は御神宝であるし、鞆そ  
のものには弓を射る際に必ずしも要る  
ものではないので聞くことがない。  
敵を威嚇する音が呪術上の音どうか  
判断する資料もない。元明天皇が聞  
いた鞆の音が、パンなのかボンなの  
か一度聞いてみたいものである。

一方、弓の弦を弾くとブーンと鳴  
るから、これは弓太鼓と称して神事  
等で用いられることがある。おそら  
く一弦琴の起源であろう。

# 特別寄稿 ラブコールは突然に

渡辺 公子

福山市在住の友から久しぶりに連絡があった。

「こちらで探訪の会というのに入っ  
てね」と彼女。

「何？タンボ？…まあ、庭先を耕す  
だけでは物足りなくてとうとう休耕  
田を借りたのね」

「違う、歴史探訪。備陽史タンボー  
の会というのがあるの」

「！」

彼女と私は、転勤族の彼女が松江  
にいた数年前に知り合った。その頃  
は歴史などそっちのけで山歩きに熱  
中していたが、私が歴史を訪ねるこ  
とも嫌いではないことを知って、松  
江からも日帰り出来そうな、会の企  
画に声をかけてくれたのだ。

題して「神楽月、薫塚野辺をひた  
歩く——高梁川右岸の石像物を味わ  
う旅」。「ひた歩く」なんて、最近歩  
いてないけど大丈夫かしら。一抹の  
不安を胸に参加を申し込んだ。

十一月二十三日六時半、まだ夜が  
明けぬ松江を発つ。伯備線の車窓か  
ら山の端を染めて昇る太陽が見えた。  
いい天気になりそうだ。

備中高梁で鈍行に乗り換えて豪溪

駅に着くと、改札口を出る前に福山  
からの会員さんたちに会うことが出  
来た。温かく迎えていただき、諸注  
意を聞き、一丁前の会員然として大  
きな顔で歩き出す。

高梁川を右岸へ渡り、最初の目的  
地、石畳神社へ。脚に自信のある人  
は神社の奥にある御神体の巨石に案  
内して下さるといふ。自信なんてな  
いけど、バカなのかケムリなのか、  
高いところ大好き！どん詰まりに  
デッカーイ岩がそびえていた。今  
春、『出雲国風土記』所載の神名備山  
のひとつ、大船山に登る機会があつ  
たが、そのの巨石といふ勝負だ。さ  
すがに御神体に取り付こうなどとい  
う畏れ多い望みは抱かなかつたが、  
眼下に高梁川を見下ろす眺望はな  
なかのものだった。

礎石が残る秦原廃寺跡に寄り、刈  
り入れを終えた田の縁を行く。青空  
が広がり、山々の紅葉が美しく、広々  
と続く田圃に、気持ちのいい開放感  
を味わう。友との再会にお喋りの方  
も忙しい。

道の辺に立つ山崎磨崖仏を拝観す  
る頃には、あんなに遠くに見えてい  
た伊予部山城跡も間近。あそこの  
つべんまで行かないとお弁当食べ  
ちゃダメだって。頑張らなくつ  
ちゃ。雨風にさらされ歳月を経て、

表面の風化で穏やかな風情を醸し出  
している仏様を拜んでから、坂をあ  
がる。お地藏様に励まされて山頂に  
立ち、まずは腹ごしらえ。満腹、満  
足したあとで、やつと景色を見るゆ  
とりも生まれ、二つの川に育まれた  
肥沃な平野に目をやった。中世の山  
城だけでなく、古代のお墓（弥生墳  
丘墓）も築かれている。豊かな生産  
力を背景に持つからこそその勢力を  
感ずる。現地を訪れて肌で感じるこ  
との楽しさよ！

つるべ落としの晩秋の一日の終わ  
りは、取り残されたように立つ二つ  
の大きな宝篋印塔。一つは住宅街の  
一角に、一つは田圃の真ん中に。塔  
だけがむき出しで存在するせいか、  
余計に大きく感じられた。隅節の反  
り返り具合で時代がわかると教えて  
いただき、以後、宝篋印塔を見るた  
びにそこに目がいくようになった。  
川辺本陣、一里塚を通過し、再び、  
朝渡つたときよりも川幅が広がった  
高梁川を左岸へと渡り、清音駅へ予  
定通り無事到着するころには、短い  
秋の日はすっかり傾き、心地よい疲  
れと充実感で幸せいっぱい。一足先  
に来た下り列車に乗り込み、福山へ  
帰るみなさま全員に送っていただ  
い、気分良く家路についた。

詳しい解説、配慮の行き届いた

コース設定、部外者を包み込んでく  
ださった温かい包容力…、楽しい一  
日がありがとうございました。今度  
は是非松江にお出かけ下さい。首を  
長くしてお待ちしています。

## 『備後古城記』を読む

【実施要項】

〈座長〉小林浩二さん(部会長代行)

〈開催日〉二月一七日(土)

三月一七日(土)

〈時間〉午後七時～午後九時

〈会場〉福山市中央公民館(二月)  
福山市民会館会議室(三月)

〈会費〉資料代として一〇〇円程度

## 古墳講座Ⅷ

【実施要項】

〈座長〉山口哲晶さん(部会長)

〈開催日〉二月二四日(土)

三月二四日(土)

〈時間〉午後七時～午後九時

〈会場〉福山市中央公民館(二月)  
ふくやま市民交流館(三月)

〈会費〉資料代として一〇〇円程度

## 『古事記』を読む

【実施要項】

〈座長〉平田恵彦さん(副部会長)

〈開催日〉三月十日(土)

〈時間〉午後二時～午後四時

〈会場〉福山市中央公民館会議室

〈会費〉資料代として一〇〇円程度

# 世界遺産法隆寺へのお誘い

平田 恵彦

僕が初めて法隆寺を訪れたのは五年前、これほど有名な寺にもかかわらず、ほんの最近まで行ったことがなかったのである。会員の中にも僕と同じような方がいらつしやるのではないかと思ひ、今回、法隆寺への旅を企画した。僕の方はその後ご縁が続き、都合五回探訪している。

法隆寺については、学校で習った「聖徳太子が建てた現存する世界最古の木造建築」というキャッチフレーズが、頭にこびりついている方が多いのではないかと思う。しかし、いまでもそうだが、大寺院は短期間に全伽藍が完成するものではない。ましてこの時代では、少なくとも二、三十年かかるのは常識だ。最古といっても、それが本堂なのか、五重塔なのか、それとも講堂なのか――。実は、僕は一番有名な五重塔だと思ひ込んでいたのだが、調べてみると、最古の建物は本堂で、よく考えてみれば当然である。五重塔は日本最古の木造塔。「木造」となっているのは、別に石造塔があるからで、石塔寺（滋賀県蒲生町）の三重石塔が最古とされている。また、石造塔

ならば、大陸や朝鮮半島にはもっと古いものがあるだろう。

ところで、法隆寺が何宗かご存じの方はいらつしやるだろうか。鎌倉時代末期に成立した浄土宗や禅宗ではないことは明らかだが、では、天台宗や真言宗かといえは、そうでもない。最澄や空海の活躍した平安時代よりも法隆寺はもっとずっと古いのである。正解は聖徳宗。

なあんだ、すると聖徳太子を顕彰するための寺で、本尊は聖徳太子？梅原猛氏の『隠された十字架』を想起された方もいらつしやるだろう。氏はこの本で、法隆寺は聖徳太子の怨霊（御霊）を封じ込めるために建てられたという説をおち上げた。いや、まてよ。そうすると有名な百済観音や救世観音はどうなるのか、本尊ではないのだろうか？――こんなふうには考え出すと、わけが分からなくなる。要するに、僕らは（僕だけ）、法隆寺をよく知っているようではほとんど何も知らないのだ。今回の企画は、法隆寺を改めて考えるきっかけになるという点で、多少の意義はあるのではないかと思っている。

だから境内はもともと広い。しかし、それを長い年月維持していくのは大変だ。由緒ある寺院が、歴史の荒波の中、規模が大幅に縮小したり、廃寺となってしまうことも決して珍しくない。時流に乗って権力者の庇護を得た寺だけが隆盛する。いきおい寺運を保てるのは権力に近い、都にある寺が多いということになる。片田舎の斑鳩にあつて、千三百年以上にわたり、創建当時の伽藍をほぼ維持してきたのは一驚に値する。

その理由として一つ考えられるのは、太子信仰の流行だろう。聖徳太子を「聖人」とする思想はすでに『日本書紀』に見受けられ、大和国の片岡山で飢えに苦しむ人々を救済した話が載っている。誰もが知っている、同時に七人の話を聞き分けたという伝説もその現れだ。法隆寺は太子信仰の一大聖地として、どの時代にも参拝者が絶えることがなかった。

もう一つ、都から離れたいたために、かえって戦災を免れたということもあるだろう。南都は何度も焼き討ちにあつているし、応仁の乱で京都の寺はことごとく灰燼に帰した。法隆寺はとても運のよい寺でもある。

世界遺産にふさわしいこの寺に、陽春三月、多くの方々と一緒に参拝できたらと思つている。

## 会報・行事案内

### 発送予定

左記は今年度の発送作業日です。郵便局への持ち込みは原則として月曜日になりますので、お手元には火曜日・水曜日あたりに届きます。しかし、これはあくまでも予定です。さまざまな都合により発送日程は変更される場合があります。

- D 一月一日(月)行事案内(済)
  - A 二月十日(土)会報九九号
  - A 三月十日(土)行事案内
  - D 四月十四日(土)会報一〇〇号
  - D 五月十二日(土)行事案内
  - C 六月二日(土)会報一〇一号
  - D 七月七日(土)行事案内
  - D 八月十一日(土)会報一〇二号
  - B 九月十五日(土)行事案内
  - D 十月十三日(土)会報一〇三号
  - D 十一月十日(土)行事案内
  - D 十二月一日(土)会報一〇四号
- Aは「古事記」を読む終了後、参加者と事務局員による発送作業。  
 Bは「備後古城記」を読む終了後、参加者と事務局員による発送作業。  
 Cは「歴史小説読書会」終了後、参加者と事務局員による発送作業。  
 Dは事務局員と有志による発送作業。

### 第三回郷土史講座

## 長和庄について

長和庄は福山市瀬戸町長和を庄域とした庄園で、立庄は鳥羽院政期ではないかと推定されています。

長和庄の地頭職は、備後守護であった長井一族が握っていました。文永十年(一一七三)、長井泰茂はその地頭職を和与(合意による贈与)によって東西に二分しています。この時、東方地頭職を甥の田総重広に分与し、自らは西方地頭職を保持したと考えられています。その後、東方地頭職は宮氏の押領を受け、不安定でしたが、西方地頭職はさらに二分されるものの、福原氏など一貫して長井一族の手にありました。

こうした流れは「田総文書」「毛利家文書」「萩藩閥閥録」によって確認でき、現在新たな研究も進んでいます。長和庄と長井一族の研究は小林定市さんのライフワークです。どんな興味深いお話が聞けるか楽しみます。ぜひご参加下さい。

#### 【実施要項】

- 〈講師〉小林定市さん(城郭部会)
- 〈開催日〉三月三十一日(土)
- 〈時間〉午後二時〜午後四時
- 〈会場〉福山市中央公民館会議室
- 〈会費〉一〇〇円程度(資料代)

### 春の青春きつぷの旅

## 法隆寺と藤ノ木古墳を訪ねる

—世界遺産の至福を味わおう旅—

春の青春きつぷの旅は世界遺産法隆寺とあの藤ノ木古墳をメインにした旅です。誰一人として知らぬ者のない法隆寺も、意外に行ったことのない方や、修学旅行以来という方もいらっしやるのでは?近年、百済観音堂(宝物館)が完成し、装いも新たになりました。電車に乗る時間は長いですが、もちろんそれだけの価値があります。入山料・拝観料を含めてのこの参加費は、青春きつぷならではの魅力です。

#### 《主な探訪予定地》

- ★藤ノ木古墳：斑鳩町法隆寺にある古墳時代後期の円墳で国史跡。会員なら知らない人はいないでしょう。優れた副葬品を数多く出土したことで著名。中でも馬具は東アジアでも第一級の製品で、極めて評価が高い。出土品は一括して国重文。墳丘は現状で直径約四八m、高さは約九mある。石室内は見学できないが、墳丘とその周辺は史跡整備されている。
- ★竜田神社：祭神は天御柱神・国御柱神。創祀については不明だが、

聖徳大社が法隆寺を建立するのにふさわしい地を探している時に、竜田明神が翁に化けて伽藍建立の勝地を教え、なおかつ守護神となる誓いをし、この地に鎮まったという。三郷町の竜田大社を本宮というのに対し、この神社を新宮ともいう。

★法隆寺：聖徳宗の総本山。改めていうまでもないが、現存する世界最古の木造建築金堂、世界最古の木造五重塔などの多くの国宝建築物を有する。また、百済観音像・夢殿救世観音像・夢違観音像などが所蔵する仏像のほとんどすべてが国宝・重文で、数え切れないほどの文化財をもつ。実際、現在も寺宝の調査は継続されている。歴史好きなら、ざっと見学するだけでも二時間はかかる。

★中宮寺：斑鳩町にある聖徳宗の尼寺。聖徳太子の母、穴穂部間人皇女の創建と伝えられる。謎の微笑で有名な半跏思惟像(国宝)、天寿国曼荼羅繡帳(国宝)を有することでもよく知られている。半跏思惟像はもちろん拝観する。  
\*万が一、時間が余った時は、法輪寺・法起寺を見学します。ただしその場合、入山料は別料金(各四〇〇円・三〇〇円)になります。

#### 【実施要項】

- 〈期日〉三月二十五日(日)
- \*雨天の時は四月一日(日)に順延。
- 〈集合時刻〉午前五時(厳守!)
- 〈集合場所〉JR福山駅改札口前  
ただし、ある程度人数が集まれば、他駅での集合も可能です。
- 〈参加費〉 会員 四八〇〇円  
一般 五三〇〇円  
(青春きつぷ代金・法隆寺拝観料「四〇〇円」・傷害保険料・資料代等含む。ただし、現地のバス代「二四〇円」は各自の負担です)
- 〈募集人数〉限定三五名(申込順)
- 〈講師〉平田恵彦さん(副部会長)
- 〈申し込み〉平田さん宅へ電話で  
TEL 〇八四九―二三―三七八一  
(午後九時〜午後十時、厳守!)
- 〈受付開始日〉二月十五日(木)
- 〈その他〉弁当と飲物を持参のこと(ただし食堂もあります)。歩きやすい服装・靴でご参加下さい。
- \*歩く距離は約五キロです。
- \*JR福山駅帰着予定時刻は午後九時三十分です。
- \*青春きつぷ持参の参加も可(その場合の参加費は二一〇〇円)。
- \*キャンセルは三月二三日(金)まで、それ以後のキャンセルは不参加でも三〇〇円いただきます。

# 事務局日誌

十二月三日(日) 徒歩例会「笠岡の古代と近代」講師は網本善光さん。参加三十六名。

十二月五日(月) 役員会参加一八名。

十二月九日(土)

▼午後三時、特別郷土史講座「最近の福山市の発掘成果について」講師は福島政文さん(市教委文化課)。参加三四名。於福山市民会館。

▼午後五時半、忘年会開催。参加三九名。於福山ニューキャッスルホテル「クレール」。新しい試みでバイキング形式を採用。

十二月十六日(土)

▼午後二時「古事記」を読む。参加二三名。

▼午後七時「備後古城記」を読む。参加一五名。

十二月十七日(日) 特別徒歩企画「常城を探る」。講師は七森義人さん。小雨決行、参加一七名はご苦労様。

十二月二十三日(土) 午後七時。「古墳講座Ⅷ」参加九名。

一月七日(日) 青春きつぷの旅「信長の野望の跡、安土城に登る」実施。青春きつぷの旅で最多の四九名が参加。さすが信長。講師は平田恵彦さん。一般参加者一名入会。

記」を読む。参加十八名。

一月十五日(月) 役員会参加一二名。

一月二十日(土) 午後七時「備後古城記」を読む。参加十五名。

一月二十七日(土) 午後七時。「古墳講座Ⅷ」参加十五名。

一月二十八日(日)

▼午後一時三十分。総会記念歴史講演会「戦国期備後国と出雲日子氏」開催。参加八六名。講師は長谷川博史先生(広島大学文学部助手)。於ふくやま市民交流館。

▼午後三時四五分。備陽史探訪の会平成十三年度総会開催。新年度の活動方針大綱を決定。参加八二名。於ふくやま市民交流館。

▼午後五時三十分。新世紀会を開催。参加六三名。於備後遺族会館。

二月三日(土) 午後二時。「歴史書説読書会」参加九名。課題図書は「北条時宗」浜野卓也著。於ふくやま市民交流館。

二月四日(日) 徒歩例会「相方城の石垣の謎に迫る」実施。参加者は六八名。現地の方が草刈りなどの準備をして下さった。講師は田口会長と平田雅郁さん。この際一般参加者二名が入会。

二月五日(月) 役員会参加一二名。  
\*とくに断りがない場合は会場はすべて福山市中央公民館です。

# 新入会員紹介

新しく次の方々が入会されました。

CONFIDENTIAL  
備陽史探訪の会  
個人情報が含まれるため掲載できません。

# 歴史小説読書会

【実施要項】

〈座長〉種本実さん(部会長)

〈開催日〉四月七日(土)

〈時間〉午後二時〜午後四時

〈会場〉ふくやま市民交流館

〈四月の課題図書〉

「鎌倉擾乱」高橋直樹著

文春文庫 定価五三三円

### 三月バス例会 総領町の史跡を探訪する

— 田総長井氏の故地をゆく —

甲奴郡総領町は、中世備後の国人衆の一人、田総長井氏の本拠「田総庄」の故地として知られる。田総長井氏は、鎌倉幕府草創の功臣、大江広元の後裔、長井氏の一門にあたり、備後田総庄に土着して「田総氏」を称えた。鎌倉時代後期にこの地に土着した一族は、最初は地頭として領主制を展開し、南北朝の動乱期を生き抜く過程で国人領主へと成長していった。今回はこの田総長井氏に關係する史跡を探訪する。ご期待いただきたい。

#### 《主な探訪予定地》

- ★川平山城跡：田総長井の居城で、比高約二〇〇メートル。五段の平坦地と直径約三メートルの大井戸、空堀等が残る。
- ★意加美神社：式内社で、現在の社殿は宝暦九年（一七五九）の再建。
- ★龍興寺：田総長井氏の菩提寺で、背後の墓地には田総一門の苔むした墓石が残る。
- ★領家八幡神社：「領家」の地名は鎌倉時代末期の「下地中分」の名残で、この八幡社は田総庄の領家方の鎮守として創建された。

★光明寺：水野勝成愛用の馬具などが伝わる。

★その他：岩屋堂洞窟遺跡（縄文時代）、松山古墳、井原城跡など、時間があれば寄ってみたい。（田日記）

#### 【実施要項】

- 《講師》 田口義之会長
- 《期日》 三月一八日（日）雨天決行
- 《集合時刻》 午前八時三〇分
- 《集合場所》 福山駅北口観光バス停（福山キャッスルホテル前）
- 《参加費》 会員 三二〇〇円  
一般 三七〇〇円

《募集人数》 四八名（申込先着順）  
五八名までは補助席で受け付けます。それ以上の申し込みがありました場合はキャンセル待ちとなります。

《申し込み》 事務局に電話で  
《受付開始日》 二月十五日（木）

《その他》 弁当と飲物を必ず持参のこと。また、山歩きのできる服装・靴でご参加下さい。

\*JR福山駅北口帰着予定時刻は午後五時です。

\*今回は会長が講師のバス例会なのでおそらくキャンセル待ちができません。一人でも多くの方が参加できるようにキャンセルは遅くとも三月十六日（金）までお願いします。

### 第二回郷土史講座

### ジャワ島とバリ島の神々を訪ねて

二月の郷土史講座は、昨年八月の「歴史を語るエジプト古代遺跡」に続き、三好勝芳さんに海外の著名史跡の解説をしていただきます。題して「ジャワ島とバリ島の神々を訪ねて」。どんな興味深いお話が聞けるか楽しみです。ぜひご参加下さい。

#### 【講座の概要】

ジャワ島・バリ島のあるインドネシアは日本と同じく大小数千の島々からなる南半球の国です。

昨年の夏、機会があつてジャワ島とバリ島を訪れました。関西空港からのJAL便はまずバリ島に立ち寄り、ゾート地として知られています。インドネシアは現在イスラム教の国ですが、バリ島は唯一ヒンズー教の島です。島々には実に二万以上のヒンズー教寺院があります。今回は、これらのうち、とくに有名で由緒のある、ティルタ・エンブル、クヘン、タマン・サリ、ブサキ、タマン・アユン、ウルン・ダヌ・プラタン、タナロットの八つの寺院を訪ねました。続いてインドネシアの政治経済の

中心地ジャワ島のジャカルタに入り、ジャワ島中部にある古い都のジョクジャカルタに飛び、その郊外にある世界遺産として有名なボロブドール遺跡（仏教遺跡）とプラナバン遺跡（ヒンズー教遺跡）を訪ねました。今回の講座では、これらの寺院や遺跡をスライド映像を基に解説しながらご案内したいと思います。（三好記）

#### 【実施要項】

- 《講師》 三好勝芳さん（事務局役員）
- 《開催日》 二月二四日（日）
- 《時間》 午後二時～午後四時
- 《会場》 福山市中央公民館会議室
- 《会費》 一〇〇円程度（資料代）

#### 【編集後記】

天候不順で寒い日が続きます。風邪など召さぬよう、くれぐれもご自愛ください。

次号で会報もいよいよ一〇〇号。記念号はオールスターでいきます。ご期待ください。（警座亭主人）

備陽史探訪の会事務局 ☎七三六六

福山市多治米町五一一九一八

☎〇八四九（五三六一五七）